

『滕王閣』 王勃

滕王閣 王勃 滕王閣 王勃

滕王高閣臨江渚 滕王の高閣江渚に臨み

佩玉鳴鑾罷歌舞 佩玉鳴鑾歌舞罷む

畫棟朝飛南浦雲 畫棟朝に飛ぶ南浦の雲

朱簾暮捲西山雨 朱簾暮に捲く西山の雨

閒雲潭影日悠悠 閒雲潭影日に悠悠

物換星移幾度秋 物換わり星移る幾度の秋ぞ

閣中帝子今何在 閣中の帝子今何くにか在る

檻外長江空自流 檻外の長江空しく自ずから流る

天折した詩人の絶筆となった名作

滕王閣は唐の滕王李元嬰（唐朝初代の高祖李淵の第二十二子、二代の太宗李世民的弟）が、洪州（今の江西省南昌市）に封ぜられた時に築いた楼閣である。それが一時荒れすさんでいたのを、後に洪州都督となって赴任した閻伯嶼が修理し、高宗の上元二年（六七五）九月九日の重陽の節句に賓客を招いて、修復を祝う盛大な宴会を催した。たまたま王勃は、交趾（今のベトナムのトン

キン・ハノイ）の父を訪ねる旅を続けて南昌まで来ていて、この宴会に招かれ、即席に作った文章が有名な「滕王閣の序」（「秋日洪府の滕王閣に登りて餞別するの序」の略称）で、この詩はその文章の末尾に付けられたものである。

このとき、王勃はまだ二十六歳？であり翌年に没したらしい。現存作品の作成状況を考えれば、この文章と本詩は天折した詩人の絶筆となった不朽の名作と見なすことができる。

【字解】

滕王閣 唐代の六五三年に滕王の建てた楼。幾度も戦乱などにより破壊された。清の同治年間に二十八回目の再建が行われたが現在のものは一九八九年に建てられたもので二十九回目の再建に当たる。岳陽の岳陽楼・武漢の黄鹤楼とともに江南の三大名楼といわれている。



江渚 貴人が腰帯に下げる飾り玉 歩くと触れ合って清らかな響きをたてる。

鳴鑾 天子の車につける鳳凰の形をした黄金製の鈴。 畫棟 絵を書いたり塗ったりした美しい棟木。

南浦朱簾雲影潭帝檻  
南浦朱簾雲影潭帝檻

江西省南昌市にある舟着き場のある入江。  
「朱」は珠に通ず。珠の飾りをつけたすだれ。

静かに流れゆく雲。

滕王閣の前を流れる江の深い淵の色や光。

帝の子。滕王李元嬰。

「檻」は滕王閣の手すり。手すりの外。

### 【解 釈】

前半の四句は、ありし日の滕王閣のさまをしのいで詠う。

滕王の高閣江渚に臨み

佩玉鳴鑾歌舞罷む

畫棟朝に飛ぶ南浦の雲

朱簾暮に捲く西山の雨

滕王の建てた高閣は、大川の渚に臨んで聳えたつ。

かつてここに、腰に下げた飾り玉や車につけた鳳凰の形をした鈴を鳴らして貴人たちがうち集い、にぎやかに歌舞が演奏されたのであろうが、その歌舞も今は昔のこととなった。色どり美しい棟木の向こうには、朝ごとに南の入江にわきたつ雲が飛びかい、夕暮れともなれば、珠の簾を巻き上げて、西山にけふる雨を眺めたことであろう。朝と暮れの対句が瞬く間に過ぎ去りゆく時間や歳

月を暗示して、滕王をしのび後半の哀切な調べを導きだす絶妙な作用を果たしている。それ故三・四句は古来、神俊・秀麗と評され、王勃の詩名は「是を以て名を得たり」とも記される名対である。

ここで詩は一転し、後半の四句は滕王という主を失った滕王閣の現況を感慨をこめて詠う。

### 閒雲潭影日に悠悠

物換わり星移る幾度の秋ぞ

閣中の帝子今何くにか在る

檻外の長江空しく自ずから流る

静かにながれる雲、深き淵に満ちた光は人間の感情とは無関係に日ごと日ごと、のどかなたたずまいを見せている。万物はうつろい、歳月はながれて、あれから幾たびの秋がすぎたことか。

この高閣に住んでいた帝子「滕王」は、今どこにおられるのだろうか。手すりの外に見える大川は、当時のま



王勃

ま、今も変わらずとうとうと流れている。と詠う後半四句には変わることに無き自然の景物に対比させて、人の世の繁華のうつろい易さに無限の感慨をよせた。

また、この詩の六行目「物換わり星移る幾度の秋ぞ」は教本C20―2「聞荒城月夜曲」（水野豊州）の三行目に出てくる「星移り物換わるは刹那の事」に似てはいないでしょうか。推察するにこの詩からの引用かと思われる。

### 【作者略伝】 王勃 六四九―六七六

初唐の詩人。山西省太原の人、字は子安、父は王福時、祖父は王通といふ学者の家の出である。六歳でよく文をつづり、九歳で顔師古がんしこの漢書を読み、その誤りを指摘したほどの早熟の才子であった。十三、十四歳のころ、高宗皇帝の第六子の沛王李賢の親王府に修撰（史書編集官）として召しだされたが、皇族が鬪鶏に興ずるのを風刺した文を書いて出府をさしとめられた。十八歳で文官試験に及第、朝散郎（秘書省著作局）を拝せられたが、職につかず、二、三年の間、四川の地方を放浪した。後、今の河南省靈宝県の参軍に補せられたが才をたのんで尊大にかまえたので、同僚から憎まれた。おりから罪を犯した曹達という官奴をかくまい、発覚をおそれ殺した事が露見して、官位を剥奪された。その罪に連座して父の王福時ふくじも交趾に左遷された。彼ははるばる父を見舞いに出かけ

たが、南海を舟でわたる途中、落ちて死んだ。歳二十八。

### ◆「滕王閣の序」にまつわるエピソード

洪州都督の閻公は江南の名士達に筆と硯をまわして、「滕王閣の記」の執筆を依頼するが、自分の婿、孟学士に序を作らせて自慢したいと思ひ、前もって構想を練らせておいた。客には執筆を辞退するようしむけた。ところが若輩の王勃が引き受けたので、閻公はその不遜な態度に激怒して座を起ち、部下に命じて、できた王勃の句を逐一報告させた。

その第一報に「南昌の故郡、洪都の新府」（滕王閣の序の有名な書き出し）と報告すると、公はいった、「先儒の常談じょうだん（ありふれた表現）にすぎない」と。続いて「星は翼軫かくしんを分かち、地は衡廬こうろに接す」は「故事（古い書物を踏まえた表現）のみだ」。

更に「三江を襟えりにして五湖を帯とし、荊蛮けいばんを控えて甌越おうえつを引く」（洪州三江や五湖を防壁のごとくめぐらす要害の地で、西の湖南・湖北や東の浙江一帯の地を押さえ取り締まる要衝である）というところ、公はスケールの大きい詩の表現に、これ以降の報告にただうなずくばかり。そして「落霞は孤鶩こぼくと斉しく飛び、秋水は長天と共に一色なり」（ただよう夕焼け雲は、一羽の野鴨とともに飛び、青く澄みわたる秋の水は、遙かな天空に連なっ

一色にとけあう)の句に到って、驚いて起ちあがり「此れ天才なり。まさに不朽の名作になろう」といった。王勃の文が完成すると、「子、筆を落とせば神助有るに似たり」(あなたはまるで神の手助けを得たような筆づかいだ)といい、名士達に見せると皆心服して一字すらも添削の余地が無い。公は最後に「帝子や私の名を後世に長く伝えさせ、洪都の山河を無上の価値に高めたのは、ほかならぬ君の力だ」と称えた。

(唐詩物語)

【備考】

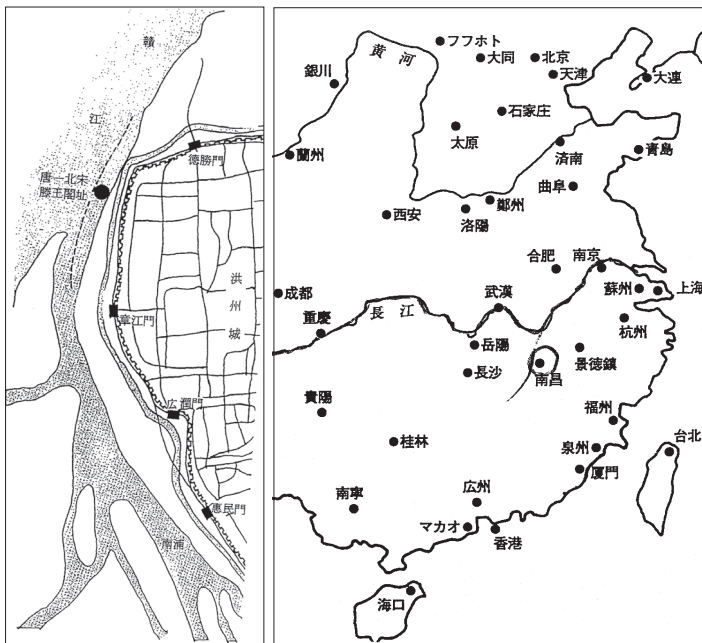
この詩の構造は七言古詩の形であって、仄韻上声六語韻の渚、仄韻上声七麌韻の舞・雨の字が通韻として使われ、下平声十一尤韻の悠・秋・流の字が使われている。古詩のため平仄は論じない。

【参考】漢詩の小知識

- 帝王の呼び名(主として唐王朝)
- 高祖又は太祖……………第一代帝王
- 漢の高祖は劉邦 唐の高祖は李淵
- 太宗……………第二代帝王
- 唐の太宗は李世民
- 高宗……………第三代帝王
- 中宗……………第四代帝王

参考資料

- 唐詩選 上……………朝日選書
- 唐詩および唐詩人…創拓社
- 唐詩物語……………大修館書店
- 唐詩選 上……………ワイド版岩波文庫
- 漢詩珠玉の五十首…大修館書店
- 中国歴代漢詩選……………有文書院



唐・宗期の滕王閣址